ユキウサギ

寿々

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ユキウサギ

【Ｎコード】

Ｎ１６４６Ｂ

【作者名】

寿々

【あらすじ】

市丸と日番谷のほのぼのストーリー。軽くＢＬ要素有り。

ゆっくりと、音も無く、また 尸魂界(ソウル・ソサエティ)に朝がきた。
朝と一緒に、雪がちらちら降ってくる。

「・・・・雪、か」
太陽が静かに昇るその横で、日番谷冬獅郎もまた、静かに朝を迎えた。
「隊長～、おはようございます～。う～寒い～っ」
眠い目を擦りながら、松本乱菊がふらふらと執務室へ来た。
長い金髪の髪がゆらゆら揺れる。

「日番谷はーん。お土産持ってきたでー」
乱菊の眠気がようやく覚め、いよいよ仕事だというのに、やっかいな奴が来た。
三番隊隊長、市丸ギン。
「何の用だ」
「お土産・・・じゃなくて書類！書類持ってきたで！」
日番谷のどす黒いオーラに負けて、市丸は素直に書類を差し出した。
「・・・分かった。早く帰れ」
「つれないなぁ・・・」
市丸は、そのまま帰らず、乱菊が座っていたソファに座った。
「ふぁあ！？」
いきなりの出来事に、乱菊は驚いておかしな声を上げた。
（ちょっと！帰らなくていいんですか！？うちの隊長怒ったら怖いんですよ！）
（だってー帰るん寒いしー。もうちょっとおりたいんやもん）
市丸はけらけらと笑いながら、乱菊が持っている書類に目をやった。
虚退治の命令だった。

「ふぅーん。なぁなぁ日番谷はん。これ、いつ行ったん？」
日番谷は市丸を睨みつけて小声で言った。
「昨日だ。俺は行ってないがな」
その声は、少し悲しそうだった。

（あーあーギンの野郎。隊長を傷つけたわねぇ）
乱菊は、もう一度書類を手に取り直した。

昨日、虚退治に行った十番隊の隊員を一人失ってしまった。
日番谷はその場にいたわけでもないし、隊員の勝手な行動、
という事で日番谷はお咎めを受けなかった。
でも、指示を出したのは自分だ。
自分に一番の責任があった、と日番谷は悔いているのだ。
乱菊は昨日のことを頭の中で回想させながら、日番谷を見た。
市丸と何か言い合っているが、とても悲しそうな目だ。
（隊長、ちっちゃいのになんでも背負いすぎなんですよ・・・・）
「何か言ったか？松本」
日番谷は意外に地獄耳である。
「何にも言ってませんよ」
乱菊も軽いため息をつきながら、天井を見上げた。

「あれ？市丸隊長は？帰ったんですか？」
くるっと周りを見ると、もう市丸はいなかった。
「さっき追い返した」
日番谷は、何か文句あるか？という風に答えた。
十番隊に、静けさが戻った。
（こんな空気じゃ、サボれないよ～）
乱菊は、一生懸命重い空気に耐えていた。
それを破ったのは、やはり市丸だった。

「日番谷はん！」
ばたばたと廊下を走ってくる音が聞こえる。
「・・・っ」
日番谷の怒りは限界に達していた。
そして、おもいっきり怒ろうとした時・・・・
「見て！」
市丸の大きな手に、小さく兎が乗っていた。
本物じゃなくて、雪で作った兎。
「・・・・俺はこどもじゃねぇ」
「いいから、日番谷はんにあげる」
その冷たい兎を、日番谷の手に押し付けた。
「わっ！つめた・・・」
兎は冷たかったが、それ以上に市丸の手が冷たかった。
きっとこの寒いのに、上着も羽織らずに外へ出たのだろう。
「市丸隊長！いたいた！帰りましょ・・・わっ！」
飛び込んできた吉良イヅルを、乱菊が取り押さえる。
「なっ！何するんですか・・・」
「しーっ！静かに。今イイとこなんだもんっ」
乱菊は笑いながらイヅルを押さえていた。

「どしたん？日番谷はん、やっぱりいらん？」
市丸が日番谷の顔を見下ろすように尋ねた。
その瞬間、日番谷は机の上にあった雪兎を窓から投げ捨てた。
「「「！？」」」
その場に居合わせた、日番谷を除く三人が、驚きの表情を浮べた。
（あー・・・隊長怒っちゃったかぁ）
（ら・・・乱菊サン。この場はいったいどういう状況なんですか・・・？）
乱菊とイヅルがごにょごにょ密談をしているとき
日番谷の大きな怒声が響いた。

「このクソ馬鹿狐！」
よく見ると、日番谷の目は涙目だった。
「この寒いのに外に飛び出して・・・風邪引いたらどうすんだ馬鹿！」
そう文句を言うと、市丸の手をぎゅうっと握った。
温かい手だった。
「日番谷はん・・・泣いてはるん？」
「なっ・・・泣いてねェよ」
日番谷は真っ赤な顔で市丸の手を握り続けた。

（これって・・・めでたしめでたしなんですか？）
（ん～・・・そうなんじゃない？）
その少し後ろで、乱菊とイヅルがくすっと笑った。

（良かったですね、隊長）

日番谷の顔は、はにかんだ笑顔で飾られていた。
その笑顔を、市丸が笑うまでは。
「あはは！日番谷はんがわろてる！」
「な！文句あるか！？」
直後、市丸の頬に日番谷の平手打ちが直撃した。
めでたし、めでたし・・・

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1646b/

ユキウサギ

2010年10月9日16時48分発行